

企画名： 「復興からはじまるエネルギーシフト」（「自然エネルギーによる被災地支援」）
実施日時： 2012年1月15日(日) 13:40～15:10
実施場所： パシフィコ横浜会議センター 3F 311 + 312
登壇者： 新沼暁之（つながり・ぬくもりプロジェクト太陽光プロジェクト設置チーム）
唐澤晋平（日本の森バイオマスネットワーク、事務局長）
参加人数： 約50名
文責： 中條真樹子（つながり・ぬくもりプロジェクト事務局）

東日本大震災「つながり・ぬくもりプロジェクト」は、自然エネルギーを利用した被災地支援プロジェクトとして昨年の4月より活動を続けています。

今回は太陽光パネルの現地設置チームとして活動していただいている新沼さん、宮城県の協力団体日本の森バイオマスネットワークの唐澤さんにご登壇いただきました。

新沼さんはご自宅が被災し、それでも避難所等への支援活動を積極的に行う中、このプロジェクトに出会いました。それをきっかけとして自ら設置技術を学び、現在はプロジェクトの現地設置チームとして活動されています。

「同じ被災者の目線で」支援の必要度を判断することができるからこそ、今もこの先も通電の見込みのない地域で、それでも漁をし、コミュニティを再建し、同じ土地で自給自足の生活を続けていこうとする人たちへ、もっともっと支援をしたいと言います。

また、当プロジェクトの太陽光発電リーダー桜井さんは、地盤沈下した広大な土地に行政の手で土が盛られ、道が通り、電力会社の手で電柱が立ち、送電線が張られてやっと電気が来る。それを待たなくとも、自然エネルギーを利用すれば庭先で電気が生まれ、すぐに明かりが使える、と言います。

今回紹介した設置事例の中に、明かりの途絶えた小さな漁港で、漁に出た船が帰ってくる時港の目印にできるよう、沖の岩の上にソーラー街灯を設置したケースがあります。こういったケースは、太陽光発電だからこそ出来ると言えるでしょう。

宮城の日本の森バイオマスネットワークの唐澤さんからは、「手のひらに太陽の家プロジェクト」等をご紹介いただきました。震災遺児や母子家庭、高齢者などの救済を優先に考えた、自然エネルギーを取り入れた復興共生住宅で、つながり・ぬくもりプロジェクトも多くの協力団体の一つとして太陽熱と太陽光での支援を行うことになっています。

また、震災を機に、被災地で自然エネルギーへの関心が高まっているからこそ、自然エネルギーを使う機会、触れる機会を支援していきたいと、震災直後避難所へ支援してきたレットストーブを、新しい支援先へ届ける活動をされており、つながり・ぬくもりプロジェクトではその中の一つ、女川のこ

コミュニティカフェへの設置に、設置費用のみ支援させていただいています。

一般の方からは、いくつか質問が寄せられました。

支援案件の優先順位をどうつけるのかという質問については、草の根的なネットワークを使っての支援ニーズ掘り起こしのため、基本的にニーズが上がった順番で、しかし状況や緊急度によっては順番の入れ替えもありうるという説明でした。

また、支援活動の見通しについての質問がありました。まだニーズが多く寄付が大幅に足りない状況ではあるが、現在の状態での設置活動は9月までの見通してあること、しかしその後も何らかの形で引き継がれ、発展していく可能性もあるという説明でした。

参加の方については、設置チームであり被災者でもある新沼さんのお話に興味が集まっており、もう少し参加者の方とフリートークなどしていただければよかったと思います。

しかし、まだ通電もその見込みもない。そしていまだに太陽光発電を設置したことでやっと明かりのある生活ができると喜んでもらえる、そういう被災地の現状がまだあるということを知っていただけたのではないかと思います。

